

滋賀県における朝鮮人強制動員の記録(3)

—韓国における生存者の聞き取り調査より—

河 かおる

人間文化学部国際コミュニケーション学科

1. はじめに

本稿では、33号、34号に引きつづき、2012年8月末に実施した「対日抗争期強制動員被害調査および国外強制動員被害者等支援委員会」との共同調査による、滋賀県に強制動員されていた生存者の聞き取り調査結果を報告する。

本号では、33号掲載表2の4番のHY氏への聞き取り調査結果を報告する。

2. 岡崎産業(株)

HY氏については、岡崎産業(株)に「労務者」として動員されていたと事前に知らされた。滋賀県内で朝鮮人が労務動員された事業所としてこれまでに名前を聞いたことがなかった事業所だったこともあり、岡崎産業(株)についてあらかじめ調査を行った。

岡崎産業(株)の前身は、1915年に八日市町金屋に設立された岡崎製織場で、帯などの織物の製造を行っていた¹。岡崎製織場は、その後、輸出用の絹紬の生産を専門としていたが、戦時時期に入り統制経済となると、原材料の柞蚕糸の輸入や製品の輸出が困難となったため、当時の経営者・岡崎耕平は軍需工場への転換を決意し、1943年に岡崎産業株式会社と社名も改めた。三菱重工業株式会社の下請けとして海軍の航空機の発動機部品の生産に転換したのである²。

発動機製造のため外部から専門技術者を迎えるとともに、軍需工場として、徴用や学徒動員された者を従業員として働かせた。学徒としては八日市や日野の国民学校高等科の生徒が動員されたという³。後述するが、HY氏は動員当時八日市国民学校高等科の生徒であったといい、学徒として軍需工場となった岡崎産業の発動機製造工場に動員されたようである。

事前調査の段階で、岡崎産業(株)について知るために、滋賀県平和祈念館を訪れ、何か参考になる資料は無いかと照会したところ、滋賀県民戦争体験談集シリーズ『記憶の湖 第二巻 子どもたちと戦争』(1998年)に、当時岡崎産業に動員された八日市国民学校高等科の生徒の担任をしていた深尾義三郎氏の聞き書きが掲載されているとご教示いただいた。

後述するが、HY氏もこの深尾義三郎氏の教え子で、大変よく記憶していた。

聞き書きの概要は次のとおりである。

深尾義三郎氏は、1938年に召集を受けて中国で負傷して傷痍軍人となった。京都に開設された傷痍軍人を教員に養成する機関⁴の1期生として1年間学んだ後、八日市の尋常小学校に赴任した。

戦時中、八日市国民学校の高等科を担当していた時、学校の近所の「岡崎という工場」に高等科生徒が動員され、一緒に通った。月曜日から金曜日まで働き、土曜日だけ学校で授業をするという生活が1年間続いた。作業内容は、アルミの板で飯盒のフタを作ったり、金属のネジやナットを作ることだった。作業中、教え子の一人が飯盒のフタをプレスする機械に指を挟んで切断されるという事故が起こった。さらに不幸にも膀胱炎を併発して亡くなってしまった。工場には防空壕があり、避難訓練もした。

この聞き書き記録のほか、渡辺守順編『写真集 明治大正昭和 八日市』(国書刊行会、1981年)から岡崎産業のほか戦前の八日市の様子がわかる写真をコピーして調査時に持参した。

3. HY氏への聞き取り調査結果概要

次にHY氏への聞き取り調査結果を見ていく。調査は、2012年8月30日午前10時半から約2時間にわたって、京畿道安養市にあるHY氏のご自宅で行われた。調査者は、筆者のほか、委員会調査2課の李姪垠氏、尹智炫氏、山村暁子氏(あすばる甲賀)である。質問は主に筆者が韓国語で直接行った。質問項目は事前調査に基づき大まかに書き出しておいたが、HY氏には見せず、自由に話していただいた。以下、話が重複・前後している部分等を時系列に再構成し、HY氏の述懐内容の概要を□で囲って示した上で、補足説明などを加えていく。なお、地名等、HY氏が日本語で発言した用語(地名以外)はカタカナで示し、()で漢字表記を補足することとした。[]は筆者による補足である。

1) 出生から渡日まで

1929年生まれです。慶尚北道盈徳郡寧海面に暮

らしていました。1934年頃、先に父が八日市に行きました。沖野ヶ原飛行場に徴用で行ったんです。私は寧海国民学校に一年通ったあと、1937年4月、母と兄弟と共に父のいる日本に渡り、八日市で暮らすようになりました。

1934年には国民徴用令は発動されていないため、言葉の厳密な意味における「徴用」ではないと思われるが、沖野ヶ原にある八日市飛行場の整備に関連する仕事で父が日本に渡ったことが、八日市で一家が生活する契機となったようである。

寧海国民学校は、1930年代当時はまだ名称が寧海公立普通学校だったと思われる。1910年開校の初等学校で、現在も寧海初等学校として存在している。

2) 八日市での生活

八日市では大字小脇という所に住んでいました。テンリキヨウ〔天理教〕の大きな教会の前です。私たちの一家のほかに、N、Oと名乗っていた韓国人の一家が、近所に暮らしていました。八日市に他にどのぐらい韓国人がいたのかはわかりません。

両親は、戦時中はボロ、古着を自転車を集めてまわって、アイロンをかけて縫って軍需工場に納品するという仕事をしていました。旋盤などを拭くのに使ったようです。近所の韓国人Oさんが代表者と一緒にやっていました。父は日本語がよくできましたが、母は日本語ができず、服装も韓服をいつも着ていました。

食糧難の時は、軍靴を作る時に出るスグレ(ウシの皮)というのがあって、それを捨ててあるのを拾ってきて、水でふやかして食べました。鮑屑に小麦を少し混ぜて調理したりして食べました。そういう調理法は日本人は知らないですよ。オボン〔お盆〕になると、盆カゴが流れて来るのを川下で捉えて食べたりもしました。

琵琶湖まで自転車に乗って釣りにも行きました。愛知川に鮎を採りに行ったとき、飛行機を森に隠すのを見ました。格納庫に隠し切れないのを森に隠したんです。軍人におにぎりをもらって食べました。

延命山に阿賀の宮がありますよね、名所、有名ですよ。

八日市の飛行場拡張工事に朝鮮人が多数従事していたことについて、何かご存知かと尋ねると、「拡張工事はうちの両親も行ってた」とのことだった

が、どのあたりにどのぐらいの数の朝鮮人が住んでいたのか、子どもだったから近所のこと以外はわからないとのことだった。

3) 八日市国民学校

日本語がわからないので、日本に来て一年ほどしてから、八日市国民学校に入りました。当時の校長先生はニシムラサワマル先生、教頭先生はキタガワヨシキチ先生です。

当時の校長、教頭の名前までスラスラ出て来るので、調査に行った一同がその記憶力に驚いていると、「当たり前じゃないですか」と笑っていた。

先述した深尾義三郎氏の聞き書きを「実はこういうものを持って来たのですが…」とお見せすると、「深尾先生、懐かしいな…」と日本語で話して、しばらく文章に見入り、「生きているならお会いしたい」と言っておられた。

フカオギザブロウ先生は担任でした。戦争で目を負傷されて片方の目が見えなかったんです。級友でよく覚えているのは、A、K、Iなどです。Aと親しくて、絵が上手で、線路の近くに暮らしていました。Iとはよく喧嘩もしました。「チョウセン パープー ニンニクサイ」と言ってバカにされました。

戦時中、米軍のグラマンをだますために、学生を動員して木造の模型飛行機をつくってペンキを塗ったりもしました。ヒエイとかトリユウとかです。その模型を並べて、本物の飛行機は隠すんです。その作業の時や、見学の時は、飛行場に入れてもらえませんでした。

1945年1月から、B29が来るようになって、沖縄から九州から比叡山を越えて名古屋を超えて東京まで行って、戻ってくるんですよ。それにヒエイがタイアタリ(体当たり)するんですよ。B29が山の所に落ちると、ガラスを拾いに行きました。燃えるとアルコールの匂いがするんですよ。

学校の運動場を畑にしてサツマイモを栽培していました。

創氏改名はやりたくなかったけど、ナイセンイッタイ〔内鮮一体〕とかいって、仕方なく苗字が「大村」になりました。苗字だけ変えて、下の名前は変えませんでした。「大村」というのは何か祖先と関係があるとかで父がつけました。

清水川に米英の国旗を並べて踏んづけて歩くよう

なこともしました。清水川で溺れそうになったひとを助けたこともありますよ。

4) 岡崎産業への学徒動員

1945年1月から敗戦までの八ヶ月間、学徒勤労報国隊として八日市国民学校のすぐ横にある岡崎産業で働いたんです。岡崎産業は、もともと岡崎織布といって、布を作る工場で、社長がオカザキコウヘイ〔岡崎耕平〕と言いました。大きな会社ですよ。軍需工場を任されて、飛行機の部品、軍で使う飯盒、寝台な、水筒などをつくっていたんです。

八日市国民学校高等科の学徒は、家が皆近かったので、寄宿舎へは入らず、家から通いました。勤務時間は朝八時半から夕方六時までです。

まず機械を扱う方法を教えてもらってから、私はハッシュクセンパン〔八尺旋盤〕の作業を担当していました。アラケズリ〔荒削り〕だけ我々がやって、シアゲ〔仕上げ〕は学生は技術がなくてできないから、事務室で女性の従業員が受け取って、職人さんがやっていました。

当時、油が無いじゃないですか。それで、八日市中学校〔現八日市高校〕の横に油を絞るところがあるので、それをドラム缶に入れてリアカーに積んで運んだりもしました。

〔深尾先生の聞き書きに出て来る〕亡くなった学生は同じ班の学生でした。字がすごく上手でした。空襲警報がなると建物の影に隠れたりして右往左往していました。

勤労報国隊は賃金はありませんでした。

持参した岡崎産業の写真(写真1)をお見せすると、「よく覚えている、こちらが入り口だった」と話された。他の、郵便局、新八日市駅、金屋通りの写真なども大変懐かしがりながらご覧になった。特に駅は今でも時々夢に出て来るという。



写真1 旧岡崎製織場

出典：八日市市史編さん委員会編『八日市市史4 近現代』1987年、p.513

5) 帰郷

日本が戦争に負けると、軍需工場の仕事が無くなったので、両親はシュロで箒をつくって売る仕事をしてしばらく暮らしていました。私が学校に通っていたので、八日市国民学校高等科を満16歳で卒業するまで待って、1946年11月に帰国しました。

何でも、申請すれば八日市から近江八幡まで出て博多まで行く無料の切符がもらえたらいいです。八日市町のほうで名簿か何かつくって。両親が手続きをして順番待ちをしていたようでした。博多から大きな船に乗って釜山へ行きました。

八日市で近所に住んでいた韓国人のNさん一家はお父さんが南方戦線に徴用されて安否がわからないからもう少ししてから帰るといって、そのまま別れて今どうしているかわかりません。Oさんもしばらくしてから帰ると言ってその後はわかりません。

釜山に着いたら、米軍にDDTかけられました。寧海のほうに帰りましたが食べるものがなくて困りました。大豆の油を絞ったカスをたべたりしてしのぎました。

1948年4月5日に韓国軍に志願して入隊しました。朝鮮戦争が始まって、従軍し、休戦するまで3年1ヶ月間戦いました。大変でしたよ。結局、軍隊には10年間いて、1957年5月31日に除隊しました。国家有功者として叙勲されました。

実は、Nさん一家は現在も八日市に在住していることが後日わかった(後述)。

朝鮮戦争に従軍した話は、映画「ブラザーフッド」さながらであった。

4. 「八日市国民学校時代を語る集い」

事前調査の段階で、滋賀県平和祈念館を訪れたことは先述したが、そこで知り合った同館のボランティアガイドで東近江戦争遺跡の会の真野生道氏に、調査後に簡単に内容をお伝えした。そして真野氏を通じて、八日市の歴史にも詳しい金念寺住職の鈴木俊亮氏に、HY氏が深尾義三郎氏や級友たちの消息を知りたがっているとお伝えしたところ、2012年12月9日に「八日市国民学校時代を語る集い」を金念寺にて開催する運びとなった。

集いに先立ち、鈴木俊亮氏のご案内で、深尾義三郎氏の墓所にお参りし、HY氏が最も親しかったと言っていたA氏の家と思われる家を訪ねた。するとそこは確かにA氏の家であったが、戦後まもなく他界していたことがわかった。

集いには、八日市国民学校の元教師や生徒など20名ほどが集まった。事前にHY氏の許諾を得て、調査時に撮影した映像の一部に字幕を付けて編集したビデオを流し、簡単に説明した後、自己紹介や意見交換を行った。すると、HY氏の近所に住んでいたN一家の一人で、現在も八日市にお住まいの方や、HY氏の話のなかで「いじめられた」として名前があがっていたI氏などが来られていて驚いた。

翌年(2013年)3月、渡韓する機会があったので、深尾氏とA氏の消息、ビデオと写真に収めた集いの様子を携えて、再びHY氏の元を訪れて、報告した。当然のことながら、70年近くの歳月を経て元級友の顔を判別できるはずもなく、「これがN? I?、全然わからないなあ…。お互い歳を取ってしまって…」と苦笑いしておられた。

5. おわりに

今回のHY氏の事例は、「学徒勤労報国」の一貫

として8ヶ月間、軍需工場で働かされたというケースであった。対日抗争期強制動員被害調査および国外強制動員被害者等支援委員会においては労務者としての強制動員として認定されているが、一般的な定義での強制連行、すなわち募集・官斡旋・徴用により行われた労務動員とは動員経緯が異なると言えよう。

33号、34号で扱ったような、徴兵による強制動員では、まとまった数の朝鮮人が組織的に滋賀県に連れて来られ、軍の仕事に従事していたという事実はわかるが、軍隊の外との接触は限られており、当時の滋賀県の在日朝鮮人社会のことはあまりわからない。一方、今回のHY氏の聞き取りでは、多くの朝鮮人が仕事を求めて家族を伴って日本各地に渡った1930年代に、八日市にも朝鮮人が住むようになり、古着回収などを生業として生活していたということがわかった。

「集い」で知り合ったN氏へインタビューをして、戦後も含めた八日市における在日朝鮮人の歴史をさらに調査したいと思いつながら、まだ実現できていない。

【註】

- 1 八日市市史編さん委員会編『八日市の歴史 近・現代 4 地場産業の変遷』1984年、p.229。
- 2 八日市市史編さん委員会編『八日市市史 4 近現代』1987年、p.512。
- 3 同前。
- 4 1939年5月に京都府師範学校に附設された、傷痍軍人尋常小学校本科正教員養成所のことと思われる。逸見勝亮「傷痍軍人小学校教員養成所の設立」『北海道大学教育学部紀要』40、1982年3月。